慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	恩師・ 前原光雄先生の逝去を悼む
Sub Title	
Author	栗林, 忠男(Kuribayashi, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1992
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.65, No.6 (1992. 6) ,p.144- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	前原光雄先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19920628-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

これも、国際法学者として著書・訳書・論文・書評をコツコツと発表され、国際法学会において慶應義塾を代表して大きな地位を占めておられたことを示すものであった。

また前原先生は体育会端艇部部長として、日本代表としてオリンピックのボートに出場する選手達を激励されたり、図書館長として本、資料の整備にあたられたり、常任理事として義塾の運営にタッチされるなど、学問以外で義塾に尽された功績も大きい。

改めて先生のご冥福をお祈りする次第である。

法学部教授　池　井　優

恩師・前原光雄先生の逝去を悼む

一九九一年七月二八日、恩師前原光雄先生が逝去された。享年八九歳であった。先生は、学内にあっては故板倉卓造教授の後継者として国際法学を長年担当されるとともに、学生部長、法学部長、図書館長、常任理事の要職を相次いで歴任され、研究・教育のみならず義塾の経営・運営にも多大の功績を残された方であった。また、学外においては、戦後再建期における日本国際法学会の理事、研究部・雑誌部委員、会計主任を歴任され、昭和四一年には国際法学会の理事長を務めるなど、学界の発展のために大いに貢献された。学内・学外の多くの人々に慕われた先生の誠実なお人柄がいま懐かしく偲ばれる。

先生のご研究は戦争法、国際法思想、海洋法、国際裁判など国際法の多方面に及んでいる。なかには、今でも議論されている領空の上限の問題を扱った論稿もある。先生のご関心が国際法の基礎理論のみならず実証的研究にもあったことは、昭和二七年に設けられた運輸省の捕獲審検再審査委員会において海上捕獲の専門家として約一〇年間務められ、後にそれを「捕獲法の研究」として大著に纏められたのを見ても判る。

学会の重鎮として国際法学界に先生が残された影響は大きい。

先生はまた優れた教育者であった。先生が学生部長時代に新入生に与えた言葉に次のような一節がある。「塾生諸君は慶應義塾において学識を習得すると同時に塾生として気品を保つことを忘れてはならない。学識は諸君の価値を決定する一部ではあるが全部ではない。諸君は在学中に智識を吸収すると同時に人格を陶冶することが大切である」。先生は常に学生をトータルに眺めようとされた方であった。

慈父のような包容力をもって人に接する先生の寛大な温かみのある態度は、常に私共後輩に希望を与えて下さった。この際いささか私事にわたることを許して戴ければ、大学三年生になり三田で先生の国際法講義に初めて接し、授業を終えて退室される先生を階段の踊り場まで追い縋って、国際法研究への自分の意欲・熱意を夢中で訴え、今後のご指導を先生にお願いするといった、今でも思い出す度に頭に血が昇るような大胆な振る舞いをしたことがある。その時、先生は国際法の学問としての幅広さ、奥深さ、発展の可能性を淳々と説いて下さり、そのうえ懇切な激励のお言葉まで頂いた。その遠い昔の出来事が今日の自分と一脈繋がっていることを思う時、そしてその後先生から賜った数々のご厚情を想起する時、謝恩の念に万感塞がれるものがある。残された後輩としては、研究・教育においてなお一層刻苦精励することが、先生のご遺志を継ぐことになるのだと思っている。

法学部教授　栗林忠男